

保育者及び教諭における童謡曲演奏の技術と指導法に関する一考察 —移調演奏の継続考察を中心に—

大阪芸術大学短期大学部 通信教育部保育学科 特任講師 塩野亜矢子

1 本研究の背景と目的

本研究は、大阪芸術大学短期大学部の学生がこどものうたの旋律を移調演奏し得る技能の習得を目指した教授法を考察し、本学学生のピアノ実技に係る基礎力向上に繋げることを目的とする。ここ数年は特にピアノの経験がない初心者の入学生が増加し、ピアノを演奏することに不安要素を抱える学生が多く見受けられる。この現象は、多くの諸大学及び諸短期大学の保育学科において共通し、本学においても同様の現象が起きていた。この状況を鑑み、本学では入学者がピアノ未経験者若しくは経験年数が約1年未満であることを前提としたカリキュラムの設定を行い、多くの諸大学及び諸短期大学の保育学科においてもピアノ初心者を鑑みたシラバス内容であると推察する。とりわけピアノ初心者は演奏しながら歌う「弾き歌い演奏」の習得には相当な練習時間を要し、かつ心理的ハードルが高いという面は否めない。更には、何とか演奏し得る段階に到達したとしても、就職先で演奏する際には本学で習得した内容と異なる調性で演奏することが求められるケースが見受けられ、臨機応変に対応する演奏技能が半ば以上上手く演奏することが出来なかった場合があったという卒業生の声が筆者の耳に入っていた。

これらの状況を鑑み、筆者は前年度に続いて塚本学院教育研究補助費を活用し、ピアノ初心者の学生がより短期間で演奏し得る奏法の習得を目的とした移調演奏についての教授法を考察し、本学学生が教育及び保育現場において対応し得る応用力の向上を目指した。最終的には本学学生が筆者の令和4年度及び令和5年度に係るコード伴奏の習得における考察と、令和6年度及び令和7年度に係る移調伴奏における考察の両方を習得することにより、今後で活用し得る演奏技能の範囲が著しく拡大されるところに特色を持ち、本学学生が習得した内容が教育及び保育現場で携わる際の対応能力向上の一助となり得るところに期待したい。

2 研究の内容と方法

本研究は、本学2年生時に筆者が担当する音楽V及び音楽VIの授業履修者（ピアノ初心者）を中心に考察を行った。移調演奏の習得には、楽譜に見られる調性で旋律を演奏し得ることが前提とすることから、前年度と同様に音程等の楽典内容への理解を並行しながら習得する過程を経る。楽譜は本学の「音楽V

及びVI」において使用する頻度が高い『こどものうた200』（小林美実（編）、1975、チャイルド社）を基に、本書記載の調性から別調性への移調若しくはその逆を中心に考察を進めた。考察対象の学生が前年度と共通している学生であるため、順を追った考察過程では本学学生の反応の良さや筆者が想定した理解度の高さが窺える過程も見られた。しかし、移調演奏の調性が増加する度に把握すべき内容に苦慮する過程も見られ、考察は難航した。掘り下げると、理論上の内容以前に「多調性の内容を理解する際の心理的ハードルの高さ」が関係していることが判明した。筆者は研究の内容及び調性範囲を再検討しながら、教授する側と教授される側の相互の視点を踏まえて試行錯誤を繰り返しながら考察を進めた。最終的には本学学生自身が理解したと自覚し得るまでに到達し、より正確な教授方法を見出すことに至ったと結論付けた。

3 まとめ

本研究は、弾き歌い演奏と楽典の基礎的知識を併用しながら考察を進め、最終的には筆者の4年に係る研究の教法を連結させるところを到達点とする。今回の考察でも試行錯誤しながら研究を行い、本学学生自身は演奏技能が向上したと自覚し得る内容に到達した可能性が高いが、その考察における検証が論理的であったとしても、教授される側の視点が各々の学生で異なることにより、効果の範囲や考察内容及び結果を断定することは出来ない。加えて学生数の減少に伴い考察対象の学生が少なかったことから、考察対象者を拡大して本研究を考察することにより、異なる検証結果が表れる可能性も否めないと認識している。しかし筆者は、確実な音楽理論を用いて学生の演奏における現状の把握及び演奏時の心理的内容を確認しながら、正しい理解及び演奏における考察を重ねてきた。その結果、最終的には考察対象の学生全員が一定数の調号までの移調演奏を導き出し、演奏し得るまでに到達したことは、その演奏技術が本学を卒業し、教育及び保育現場で携わる際の演奏にも紐付けることに奏功した結果が得られたと考えるには十分な成果であった。

本研究は今後に考察対象者を拡大し、今回の結果と比較検討するよう、稿を改めたい。